

人生は

長さじゃない

深さです

幅です

金子 大栄

『2025年難波別院カレンダー』11月のことば

掲示板のことば

今年の7月、お寺の婦人会で役員さんから「今日は七夕だから、皆で短冊に願い事を書いてみない？」と提案がありました。「それは面白そう」ということで、それぞれの願い事を書くことになりました。

「お寺で願い事はおかしいんじゃない？」などの声があるかも、と少し案じていましたが、いざはじめると皆さん書く書く。短冊が一枚で足りず、願い事のおかわりをする人も。結果、いちばん多かった願い事はダントツで「健康で長生き」でした。

「ない」と応えられた時、妙に自分と共感するものがあるなあと、つい笑ってしまいました。自分自身、本当にしたいことは一体何なのか、深く考えることなく毎日を過ごしてきましたが、じっくり考えてみても、なかなかピンときません。

以前ある研修会で池田勇諦先生から「私の人生をかけた本当の願いというの自分では分からないでしょう。だから阿弥陀さまがあなたの本当に願っていることはこれです」と本願の教えを説かれたのです」と教えてくださいました。

あなたの人生本当にそれでいいのですか？この法語はそんなことを私に問うてくださっているような気がします。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

一一いちいちのはなのなかよりは

三十六さんじゅうろっぴゃくせん百千億おくの

光明こうみょうてらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

ようになり、それが私自身の今の課題となっていました。

最近では「移住者促進」に向けた様々な活動に参加させていただい

「祖父の家」であつたお寺を継がせていただいて丸20年が過ぎました。

引越してきた当時のことを思うと、「お寺ばなれ」や「墓じまい」などお寺を取り巻く状況も随分と変わってきたように思います。

特に、過疎地域にある私のお寺は人がいなくなっていくことが何よりの問題で、お寺を復興するためには地元を活性化することが一番大事なことになるのではないかと考える

いがけないところから縁が繋がることもありま
す。相変わらず人口も、
それに伴うご門徒さんも
減っていく一方ではあり
ますが、お寺に来てくれ
る人は増えてきたという
なんとも不思議な状況で
す。

一一のはなのなかよ
りは／三十六百千億の
／光明てらしてほがら
かに／いたらぬところ
はさらになし

この和讃では、浄土の
はたらきがそこに咲くは
なの放つ光として表現さ
れています。

またその光は、「いたら
ぬところはさらになし」
とうたわれているように、
届かないところはないそ
うです。

光があれば影もあるも

のですが、阿弥陀仏の本願の光は、どのような場所にいるどんな人であっても照らしてくれていると表現されています。

この先も、住職としてお寺に居られるのか、生活はどうしていかうか、子ども将来、町が行く末……。それらの不安が吹き消されたという経験は今のところありませんが、私が今こうしてお寺に住み、なんとか生活させていただいていること自体が、照らされ、救われていることなのだろうなど日々の生活の中で、近頃は特に感じております。

(畠中 光炎)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 576頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 123頁

「知ってる？ 仏事のあれこれ」

「報恩講」ってなあに？



「お霜月は報恩講のこと」

八尾市 慈願寺 鹿崎 正明

親鸞聖人は、弘長二（1262）年十一月二十八日に、九十歳で亡くなられました。東本願寺では、毎年十一月二十一日から二十八日までの七昼夜八日間報恩講が勤められます。ですから報恩講のことを「お七夜」とも呼びます。

旧暦十一月は「霜月」といい、上に「お」をつけて「おしもつき」というと報恩講のことを意味しました。「提灯の下に遊ぶ子お霜月」（吉岡 禅寺洞）

など、俳句の季語としても使われていました。

昔、私の育った在所では、在家の報恩講の勤まる日の夕方に「今日は誰それさんの家の報恩講さんやからお参りしてや」と子供たちが村中を触れて歩いたそうです。その後、ご門徒宅で報恩講を勤めるのですが、「お勤めの後、毎晩同じ顔ぶれにお話するのは、若い時は大変やった」と晩年に父親が話していました。

報恩講のお勤めの最後

には、「恩徳讃」と呼ばれている和讃が勤められます。

如来大悲の恩徳は
／身を粉にしても報
ずべし／師主知識の
恩徳も／ほねをくだ
きても謝すべし／

親鸞聖人自らが恩徳と
感じられた、阿弥陀如来
の大悲と、師主知識とはど
ういうものなのでしょう。

親鸞聖人は、お釈迦様
の説法に説かれる法蔵菩
薩（阿弥陀如来）の長い
修行も、親鸞が信心を得
るためだと受け取られま
した。お釈迦様以後、親
鸞聖人にまでお念仏の教
えを伝えてくださった七
高僧と呼ばれた、インド
の龍樹菩薩・天親菩薩、
中国の曇鸞大師・道綽禅
師・善導大師、日本の源
信僧都・法然上人、そし

て善知識の方々のご苦勞
も深い恩徳と感じ取られ
ました。自らを「罪惡深
重の凡夫」と明らかにさ
れたご恩に対して、身を
粉にしても、骨が砕けて
も報ずべしとうたわれ、
法然上人の「ただ念仏す
べし」の言葉に出遇われ
た親鸞聖人は、煩惱に振
り回される身を深くうな
ずいていかれました。

親鸞聖人に出会われた
人たちや、ご縁をいただ
かれた人たちは、聖人の
残された言葉を手がかり
に、何度も何度も、念仏
のいわれを確かめる集ま
りを持たれました。年に
一度の御命日にあたる集
まりを本願寺三世の覚如
上人が、「報恩講」として
伝えていかれ、今も続け
ています。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈243〉

